



私たち一人ひとは教会のメンバーです。教会のメンバーは一般信徒、神品であろうとも罪を犯し、誤ちも犯します。しかし、「一つの聖なる公なる使徒の教会」は正しくあり続けます。「教会」は完全なるお方、ハリストスのからだであるからです。教会と教会に属する人々の間には、この意味で常に緊張関係があると言えるでしょう。

しかし、教会が使徒的な伝統を純粋な
かたちで守り続けてきたなど、どうした
ら分かるのでしょうか。簡潔に答えるなら、それは神が教会において守り続けてきたから、という答えになります。なぜなら神ご自身が守り続けると約束されたからです。ハリストスはご自身が教会を建てる、そして黄泉の力もその教会に打ち勝つことはないであろう、とおっしゃりました(マトフェイ 16:18)。ハリストスご自身が教会のかしらであり(エフェス 14:15)、教会はハリストスのからだです(エフェス 1:22-23)。もし教会が使徒的な伝統を純粋なまに保てていなければ、真理はもはや失われていたことでしょう。というのも、教会は真理の柱であり、真理の基礎であるからです(ティモフェイ前 3:15)。一般的なプロテスタントの人々は教会の歴史についてこのように考えています。コン

道央宣教セミ・ブロック機関紙

(札幌・小樽・苫小牧)

会 報

2024.6.1. No.409



札幌ハリストス正教会 発行 苫小牧ハリストス正教会

発行責任者 管轄司祭 エフREM後藤悠太

〒062-0042 札幌市豊平区福住 2 条 2 丁目 3 番 1 号

TEL:011-852-5644 FAX:011-856-0818

郵便振替 02790-8-4469

<http://www.orthodox-jp.com/sapporo/>

E-mail haris-sp@bz01.plala.or.jp

「聖書のみ」という教えは 本当に正しいのか (4)

スタンチン大帝の時代から宗教改革が起きる前までは、教会は背教に陥っていた、というように考えているのです。しかしこのように考えることで、今取り上げた聖書の句、あるいは他の句を意味のないものにしてしまっています。もし教会がたった一日でさえ存在しない日があったのなら、その日、黄泉の力は教会に打ち勝ったことになるでしょう。ところで、ハリストスはからし種のたとえを使って、教会の成長について語られました。もし教会が存在しなかった時があったのであれば、からし種の苗は成長し始めた途端に踏みつけられ、しかし後に同じところに新たな種が発芽した、とハリストスは語られたことでしょう。しかしハリストスは、はじめは小さかったが、少しずつ成長し、やがてそれが大きな木になったというからし種のイメージを語られたのです。

- ・マトフェイ 16:18 わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれ(教会)に打ち勝つことはない。
- ・エフェス 14:15 愛にあつて真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるハリストスに達するのである。
- ・エフェス 1:22-23 そして、万物をハリストスの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。この教会はハリストスのからだであつて、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない。
- ・ティモフェイ前 3:15 神の家というのは、生ける神の教会のことであつて、それは真理の柱、真理の基礎なのである。

千年もの間、正しい信仰を持ったプロテスタントのグループがいくつか存在し、どこかの洞穴で生活していたのだという仮説を立てる人々もいます。しかしどこにその証拠があるのでしょうか。ヴァルド派という、ペンテコステ派からエホバの証人に至るまで多くのグループが自分たちの先駆者であると主張している人々がいます。しかし、彼らは12世紀よりも前には存在していませんでした。このような正しい信仰を持った人々がローマ帝国の厳しい迫害のもと勇敢に耐え抜き、しかしキリスト教が国教となるとすぐに逃亡したのであろう、と信じる人々がいます。しかし、そこには控え目に言っても若干の拡大解釈が含まれていると言わざるを得ません。けれどももっと突飛な考え方もありますので、確かにこのような可能性もなくはないように思えます。その突飛な考え方とは、このような正しい信仰を持ったグループが、自分達が存在したとする痕跡を歴史上の記録に一切残さないまま千年間存在し続けた、とする考え方です。

この点に関して反対の意見を言う人もいるかもしれません。教会の歴史にはお互いに反対の教えを述べる人々がいた。これは事実である。そうであれば、だれが使徒的な伝統を正しく伝えていると言えるのか、という意見です。もっと言えば、墮落した慣習が生じた場合どうなのか。その墮落した慣習と使徒的な伝統をどうやって区別するのか、とも言

います。プロテスタントの人々がこのような疑念を抱くのは、ローマ・カトリック教会において、もともと教会には存在しなかった新しい、墮落した「伝統」が生まれたからです。しかしその原因は、まずローマ・カトリック教会が伝統の本質を理解し損なったからです。正教の理解によれば、根本的に伝統とは本質的に不変のものであり、何が伝統であるかは、その普遍性と公同性によって見分けられます。この理解は、もともとは西方世界にも広く行き渡っていた理解です。正教会において今に至るまで守られ続けてきた理解です。正しい使徒的な伝統とは、教会の教えの中でも、教会の歴史を通じてコンセンサスが得られるものの中に見出すことができます。教会が常に信じ、教会がその歴史を通して信じ、教会のどこにおいても信じられているものが見つかれば、真実を見出したことになるでしょう。どのような信仰であっても、歴史のある時点で教会に受け入れられていないことが分かれば、その信仰は異端です。ただしここで言う教会とは「教会」のことであつて、分離派のことではありません。新約の時代から教会から袂を分かち分離派、異端の存在がありました。そのような存在は、歴史を経ても次から次へと現れます。それは聖使徒パウエルが書いているように、「あなたがたの中でほんとうの者が明らかにされるためには、分派もなければなるまい」(コリンフ前 11:19)からです。

札幌教会 復活祭



5月4日(土)の夜から5日(日)の早朝にかけて復活祭が札幌教会でお祝いされました。当初はなかなか深夜の参拝は厳しいのではないかと予想しておりましたが、60名ほどの方が参拝されました。そのうち半数近くが外国人の信徒の方でした。

11時半になり、夜半課が開始され、プラシャニーツァが至聖所に運び込まれ、宝座へと安置されました。12時になり十字行が開始されました。今年は聖堂の周りではなく、公道に出て教会の敷地外周りを大きく廻りました。ハリストスの復活というものが単に「聖堂内のこと」ではなく、この世全体に影響を及ぼしたものであるということが実感されました。復活祭のトロパリが何度も何度も歌われました。日本人は日本語で、ロシア人の方にはロシア語で交互にトロパリを歌ってもらいましたが、共に祝うという意味でとても良い試みでした。

聖体礼儀の福音は日本語のほかに、ミハイル兄にスラブ語で、アントニイ

兄に英語で読んでいただきました。

復活祭の祝いは何もかもが「特別」でした。そして何よりも「喜び」でした。「いてもたってもいられなくて、こんなに早く来てしまった」という方もいらっしゃいました。祝賀会、皆さんで歓談をしていると、以外にも早く白々と夜が明けてきました。外で信徒の方を見送っていますと、朝早くハリストスがよみがえられたことが思い出されました。世界は何一つ変わっていないにもかかわらず、その世界を見る目は明らかに変わっていました。ハリストスはこの世で復活され、まさにその世に私たちが生きているのだ、ということが分かりました。

さらに5日当日の午後から「愛の晩課」が行われました。深夜は難しいという方、また深夜の聖体礼儀にも参拝して、さらに晩課にも参拝された方もいらっしゃいました。多くの方と復活祭の喜びを共にできたことに感謝です。



苫小牧教会 復活祭



5月12日(日)、苫小牧教会にて復活祭が祝われ、十字行に引き続いて早課、時課、聖体礼儀が行われました。札幌の信徒の方も多く参拝され、10名のほどの人数になり、普段の主日よりものにぎやかな聖体礼儀となりました。

婦人会だより



5月2日は20数名が卵染め、聖堂のお掃除に分かれて作業し、時間内に終わらせることが出来ました。ご協力ありがとうございました。

また復活祭の祝賀会の準備、後片付けのお手伝いも感謝します。当日はお菓子、お酒の差し入れがありました。

ありがとうございます。

次回は6月5日(水曜日)に庭の草取りをします。9時頃から始めてお昼頃までには終わる予定です。多くの方のご奉仕お願い致します。

(パラスケワ中野良恵)



北海道ブロック拡大宣教会議



5月18日(土)、19日(日)に上磯教会で北海道ブロック拡大宣教会議が開催されました。東日本主教教区の宗務局長のマルコ小池神父さまの他、北海道ブロックの司祭、宣教委員、各教会の執事長が出席しました。

1日目はまず小池神父さまより挨拶がありました。「古代の教会はお互いの中にイエスの存在を確認し、そして互いに尊敬し合う、そのような共同体であった。私たちは今はそのような姿からほど遠いかもしれないが、少しずつそこに近づくべきである」という趣旨のお話をいただきました。

小池神父より教団の報告、また各宣教委員が自教会の今年度の活動について簡単に報告しました。また今年の釧路教会主催のキャンプについて、また来年度の北海道ブロックの予定について話し合い

が行われました。キャンプについては現役世代の信徒が出席できるようにするため土、日開催も検討すべきではないかという意見が出されました。

2日目は、前回の宣教会議で十分討議できなかった問題について話し合いが行われました。「代式祈祷の意義の啓蒙や祈祷の行い方について」、「信徒の高齢化、信徒数の減少について」、「信徒の学び、伝道会の開催について」、「教会内でパワハラ、モラハラがあった場合、どのように対処していくのか」といった問題に対して活発な討議がなされました。特に教会内のパワハラについては、そのような問題が起こらないよう、北海道ブロックの3司祭で協力する体制をつくっていくことが確認されました。



○2024 年

7 月 31 日 (水) ~ 8 月 2 日 (金)	キャンプだホイ！	十勝エコロジーパーク
8 月 24 日 (土)、25 日 (日)	宣教会議 (第一回)	札幌教会
9 月 22 日 (日)、23 日 (月・祝)	聖歌リーダー研修会	札幌教会
10 月 19 日 (土)、20 日 (日)	誦経奉仕者研修会	釧路教会
11 月 16 日 (土)、17 日 (日)	聖歌研修会	函館教会
11 月 23 日 (土)	リモート宣教会議 (第二回)	

○2025 年

5 月 (日にちは未定)	拡大宣教会議	苫小牧教会
--------------	--------	-------

札幌教会 臨時執事会

5 月 12 日 (日)、急遽臨時の執事会が開催されました。簡単ですが、議事録を掲載いたします。

●教区負担金について

・今年度はまだ決算を出していないが、赤字になる見込みである。通常会計から教区負担金を 150 万円支出できなかったため、聖堂修復基金を崩して充てることとする。

●聖堂修理の献金の呼びかけ

・聖堂修復基金を切り崩したこと、はじめの見積もりより工事費用がかさむこともあり、聖堂修理のための献金を呼びかける。日本人の信徒だけではなく、外国人の信徒の方も含めて幅広く呼び掛けたい。

●今年の復活祭の反省

- ・当初の予想を超え、60 名くらいの信徒の方が参拝した (うち、外国人の信徒の方が 30 名近く)。
- ・ロシア語でトロバリを歌ったり、外

国語で福音を読んだのが良かった。

・愛の晩課を昼行ったことによって、深夜来ることができない方も来ることができた。

・来年は近隣住民の方や一般の方へも「正教会の復活祭」をアピールしていきたい。

●2025 年のキャンプについて

・場所については、第一希望がネイバル深川 (深川市音江)、第二希望は音江広里交流館エフパシオである。

・日時は 7 月 29 日 (火) ~ 31 日 (木)、あるいは 8 月 5 日 (火) ~ 7 日 (木) のいずれかにする。

・二日目は富良野方面へバスで出かけて活動をする。具体的な活動についてはこれから調べていく。

・今後、キャンプについての基本的な方針は執事会の話し合いの中で決定していく。

お 知 ら せ



◎キャンプだホイ！参加受付が始まりました

今年度のキャンプだホイ！の要項を会報と共にお送りします。今年はなんと乗馬体験もあるそうです。ぜひ参加してみては！(教会に申込書があるので、お名前や住所、参加希望コースなど記入してください)申し込み期限は 6 月末頃までとなっております。

◎教会費の封筒

今年度の教会費の封筒を会報と共に同封いたしました。ご自身の名前を記入してお使いください。